

旭川文学資料友の会

友の会通信 第27号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会
〒070-0044
旭川市常磐公園 旭川市常磐館内
電話 0166-22-3334
印刷・株式会社あいわブリント

感館楽学

新館長 三原一仁

今年度の活動について

会長 十河 宣 洋

総会が二年続きの書面評決になってしまいました。会員の皆様には何かとご心配をかけています。文学資料館も井上靖記念館ともにコロナの推移などを見ながら事業を進めてきました。

教育委員会等と連絡を取りながら休館、イベントの中止などをはじめボランティアの縮小などコロナ対策を含めて事業を進めてきました。

今年度に入ってから事業の縮小や休館があります。特に旭川文学資料館、井上靖記念館は遠くから訪れる方が多く、来館者に残念です、と言われることもあります。

旭川文学資料館
三月末現在でデータの入力件数は七九三二六件になりました。来館者はコロナの影響で七〇四名と大幅に減りました。

企画展は「歌誌『かぎろひ』65周年記念展」、小熊秀雄没後80周年記念展「小熊秀雄と旭川の詩人・歌人たち」を開催しました。

井上靖記念館
来館者は令和二年度、二六六九名と前年度

より減少しました。

「井上靖 蔵書展Ⅱ 戦国時代の史料」、
「井上靖 人と文学XI 『幼き日のこと』を巡って」、
「井上靖の旅Ⅰ 日本編」、特別展示
3・11文学館からのメッセージ 井上靖 『幼き日のこと』より「あらし」より、の四つの企画展を行いました。

青少年エッセーコンクールはテーマ「道」に応募作品は二八三編ありました。館での表彰式は中止し、吉増審査委員長の講評を中心に、オンライン表彰式を実施しました。

令和三年度は、旭川文学資料館は、「木野工『旭川今昔ばなし』直筆原稿展」絵・写真と共に、「旭川ゆかりの俳人藤田旭山展」を実施します。

井上靖記念館は、「井上靖 蔵書展Ⅲ 日本及び中国・西域の史料」、
「井上靖の旅Ⅱ 海外編」、
「井上靖 人と文学XII 『わが母の記』執筆の頃、特別展示3・11文学館からのメッセージ等を企画しています。

青少年エッセーコンクールも例年通り実施いたします。

新型コロナウイルスの関係で多くの方に迷惑をかけていますが、友の会といたしましては、状況にあわせた運営をしていきます。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



絵画彫刻は美術、歌舞音曲は舞踊音楽、詩歌散文は文学という。「術」や「楽」よりも「学」にはどうも上座がふさわしいようだ。書道は「道」、これも何やら重々しい。

美術とはいっても音術や書術など、まして文学などは聞いたことがない。音楽はあつても美楽や書楽・文楽などはないだろう。いや、つまり「文楽」と書いてブンラクはあるがブンガクはない。

術だの楽だのはエンターテインメントの匂いもするが、学だとアカデミックにかしこまりそうだ。音楽や美術系はアートと言ったりするのに、文学をアートと表現することはそうないし、それどころか、文学をアートとよぶと、ちよつと軽い印象になりそうで文学はもつと重厚なものだと論されそうだ。

時代をたどれば、歌舞音曲の人よりは、文人墨客は居住まい正しくすまし顔に見えるというのには思い過ぎに違いない。

そういえば、画家や彫刻家であり書家や音楽家なのに、文学家とは寡聞にして覚えがない。美学者や音楽学者といえば、それはまた別の意味になるし、まして文学学者という方は耳にしない。文学家ではなく、なぜ文学者なのか。「学」

の字のなせる技か。「学」とくれば「者」は、これは定石で学者となるのは必定。やはりどうも「学」の字がお高くとまっているのか。

アートというカタカナ語はライト級だとしても、芸術といえば香気ただよう高尚な気配もある。ならば「芸」を活かして、ここはやはり文芸とか文芸家あたりか。「文藝春秋」もあれば、工芸・手芸・文芸・学芸ともいう。

だが「芸」に続くのは果たして「家」だけなのか。「者」だとしたら芸者となつてこれはこれで小首を傾げるか。いやいや武芸者というのもあるではないか。

ことほどさやうに文字表現の難しさを感じつつ、六月から資料館の館長を仰せつかつております。よしなにお導きくださりませ。

企画展

「木野工『旭川今昔ばなし』 直筆原稿展く絵・写真と共に」を終えて

沓澤 章 俊

旭川生れの作家 木野工の著書『旭川今昔ばなし』の直筆原稿と、旭川スケッチ研究会会員の素敵な作品、そして、戦前からの旭川の街並みの写真を展示紹介した企画展でした。(展示総数は三六二点)

観覧された方々は口をそろえて、なんとも言えない味のあるスケッチと、原稿、写真がマッチして、観ていて楽しいと言ってくれました。

昭和五年から七年にかけて行われた牛朱別

川の切替工事以前、当館が建っている常磐公園園一帯は、牛朱別川と石狩川にかこまれた中州でした。その頃、今のロータリーのところには常盤橋という橋が架かっていて、中州の半分は常盤町であり、ここから当時の道楽橋を渡って少し行くと中島遊郭でした。

是非お読みいただきたいおすすめの小説、木野工の代表作『檻樓』は、この切替工事の頃が時代背景となつています。中州の北側、石狩川に架かる橋、旭川のシンボルでもある「旭橋」もこの頃、アーチ型の頑丈な橋に造り替えられました。日本国内で同じ形式の橋は例えば東京の白髭橋などです。

会期中、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言の発令を受け、また、当館すぐ近くの石狩川河畔で熊が目撃されるという旭川でもめつたにない事件?などもあり、臨時休館を余儀なくされ、開館日数は当初見込の六割程度だったものの延べ二四六人の方々に観覧いただきました。

記念講演会は、五月十五日の実施予定でしたが、コロナ禍のため延期し、七月三十一日(土)になんとか実施することが出来ました。今年百歳の菱谷良一さんの話しはとても興味深く、マイクなしでも通る声、ハッキリしつかりした話し方で参加者を魅了しました。(参加された方の感想をお読みください)

今回の企画展で使用した写真が掲載されている写真集『まちは生きていく』上下巻(総北海発行)の編者 渡辺義雄さんの言葉が、木野工『旭川今昔ばなし』二二四、二二五頁に紹介されていて、街、街並みにこだわるのはどうしてか、それがわかる文章なので少し



記念講演前に企画展を観覧する
旭川スケッチ研究会会員の
菱谷良一さん(左)と平間純一さん
2021年7月31日

長いですが紹介して終えたいと思います。

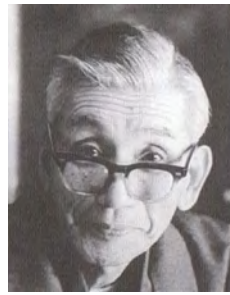
「街並み再現にどういいうわけこれほどの情熱を燃やしているのかと聞いたことがある。渡辺さんは初め淡々と『物好きだからですよ』と笑って取り合わなかったが、だんだん話がはずんで来て、遂に本音とも聞える名言を吐いた。『街は、店は、です、そこに生涯のある時期あるいは一生を通じてある人が住んでいたというだけのことでしょうが、住んでいた人たちにとっては生命を賭けた城でした。勤め人の住宅とはまるで異なつた意味を持つています。城であり戦場であつた家は、その人たちにとつての生けるしるしであり、かつてここに何某ありという墓標、墓碑であると思います。街の歴史を、そこに住んだ人たちの歴史の集大成と考えるなら、街並みの由来は後に続く人たちにとつても大切な意味を持つてはいるはず。余りにも粗末に

今後の企画展等実施のお知らせ

■第二十四回旭川文学資料展

「旭川ゆかりの俳人

藤田旭山展」



藤田 旭山
(1903～1991)

旭山寸言 (作句メモ帳より)

俳句はくだけた文学だから、気取つてゐては、いいのが出来ない。

俳句も味付けがよくないとだめ、ただこんなことがありました、ではつまらない。

同じ内容なら、リズムの良い方が勝である。面白くても、言葉遣いの正しくない句は、恥ずかしい。

同じ分量の水でも人物によつて、たてに深いのと横に広いのとある。

個性は知情意の配合による。円満は同量。

この文は、藤田旭山が旭川で主宰発行していた俳誌「俳海」二四一号(藤田旭山追悼号、平成三年七月一日発行)の五頁に略歴と共に紹介されている寸言です。

旭山の俳句に対する考え方がよく表現されている文ではないでしょうか。

今年十一月二日(火)から来年の三月二十日(土)まで、第二十四回旭川文学資料展として、企画展「旭川ゆかりの俳人 藤田旭山展」を開催します。

先ほど引用させていただいた追悼号等を参考に、旭山の略歴を紹介しますと、

藤田旭山は明治三十六年一月十六日、藤田長次郎、るいの六男三女の長男として土別に生まれる。本名 国道。大正十年、庁立旭川中学校(現 旭川東高等学校)を卒業(第十四期)。

昭和二年、明治大学法学部卒業。同年、長次郎経営の酒造業藤田合名会社(のちに日本清酒に合併)に入社。同年、松枝(月女)と結婚。三男三女をもうけた。同年十月一日、大学在学中から師事していた室積徂春の「ゆく春」創刊に参画、のち「ゆく春」選者となる。昭和十九年から四十三年まで旭川工業高校教諭(国語)を勤める。同四十三年十月から俳誌「俳海」を主宰発行。平成三年、同誌「俳海」新年号第二四〇号発行。平成三年三月六日、自宅にて死去。行年八十九歳。

今年は没後三十周年。また、旭山の従弟は加藤隼戦闘隊長の加藤建夫で、共に明治三十六年生まれです。

昭和四十三年(一九六八年)十月一日発行の「俳海」創刊号は、旭川の書家 赤石蘭邦の表紙文字から始まり、表紙裏には詩人の小池栄寿の「祝詩」、その下には、旭山自身による次のような「ごあいさつ」が掲載されています。

「この度同人諸子の宿望に応へ、「自由で正しい俳句」を旗印にして、旭川ゆく春会から、この「俳海」を発行することになりました。(以下略)」

次項の扉には、志賀直哉の題字と、佐藤進の口絵が印刷されています。祝辞には、俳句関係者は勿論、一時期、旭山の句会に参加していた三浦綾子や、詩人で珈琲亭ちろる主人の下村保太郎も創刊を祝う文を寄せています。旭山の自宅は「旭光荘」と呼ばれ「俳海」の例会が開かれていました。この建物は、三浦綾子の小説「氷点」の辻口邸のモデルにもなり、今年、「旭川の歴史的建物の保存を考える会」(軽部望会長)より、第二十四回建築賞を受賞しました。

今回の企画展では、藤田旭山の人と作品などを、句集、俳誌、直筆原稿等により展示紹介したいと思っています。

「俳海」創刊号



旭山追悼号(終刊号)



■ミニ展示室の活用

新たに、ミニ展示室のスペースを設けました。ここでは、地元でもあまり取り上げられてこなかった、または、現在活躍中の旭川ゆかりの、文学関係者や団体に、新たな視点からスポットをあて展示紹介してゆく予定です。

有島武郎と『松むし』

—その六—

片山 礼子

今号は、有島武郎の詩を紹介します。

瞳なき眼(序詩)

あからさまに云はう。
 大千世界は瞳のない眼だ。
 見開いたまゝ瞬きをしない眼だ。
 劫初から劫末へ、
 ギヤマンの皿にすかして見る魚賊の皮膚
 の色のやうな白眼だけが、
 凝然として、動かずに、流れずに。
 可憐な小さい一つの瞳が、
 燃えかすれゆく隕石のやうに、
 瞳のない眼の灰色の面に吸ひこまれる。
 見る く

今在る、あるかなきかに
 ……もう無い。
 可憐な小さい瞳が
 おゝ可憐な小さい瞳が、

瞳の妄執に黒く燃え立つ小さい瞳が、
 可憐な小さい瞳が……
 淋しさ……せめては叫べ、ひと聲。瞳
 よ。
 (三月十一日)

この詩に関しては、有島武郎にとっては、
 晩年の時期に位置する。少しでも当時の有島
 武郎の状況を把握するためにもこれらの詩に
 無関心ではいられない。自分自身に向けられ
 た冷静な視点を読み取ることが出来ないだろ
 うか。「瞳のない眼」は、ある種の冷静、な
 おかつ客観的なこの状況に看過できない情況
 も浮上する。同様に、「電車の眼が見た」の詩
 についても紹介してみたいと思う。

省線の高土堤をひらめきゆく電車の眼、
 その眼が見る土堤下の人の渦巻き、
 かげらふの見えがくれ、
 葉巻きの煙が風に揺られて
 するりと横さまに飛び消える。
 何んでもない、
 人は睦まじく生きてがってるじゃない
 か。
 その折りが横さまに飛び消える……ひら
 めきが消える。
 (三月十日)

有島武郎は、「ホイットマン」詩集を翻訳し
 たり、生き方にも共鳴し憧憬にも似た思いで
 ホイットマン詩集に向き合っていたことは事
 実である。また、妻、安子さんの短歌にも関

連して「有島武郎と『松むし』」でもふれた
 が、武郎の短歌や俳句には実景にもなうり
 アルさが特徴とも言える。ただここで見落と
 せないのは、その頃の武郎を取りまく状況に
 注視しなければならぬだろう。

事実、先にあげた詩についてもいえるのだ
 が、いずれも有島武郎の晩年に位置する。
 大正九年を期に、次第に武郎の創作意欲が
 失われていることにも注目しなければならぬ
 い。

冒頭の「瞳なき眼」、「電車の眼が見た」の
 詩にしても、かつての内から湧き出る情熱が
 あまり感じられないのである。そのことは、
 同日に記した「人生」についても同じような
 ことがいえるのではないか。

生命のうろつきの間に見えるなまけた幻
 影—人生。
 (三月十日)

ここにもなぜか、あきらめにも似た状況が
 映しだされてはいないだろうか。

有島武郎自身について、短歌などに造詣が
 深かったことは否定できない。安子さんに短
 歌を詠むことを勧めていたことも事実である。

しかし、ここで見落とせないのは、その頃の
 武郎が詠みあげた短歌と今回取り上げた詩に
 おけるモチーフなど、視点の向け方に違いが
 認められないだろうか。これまでの武郎の歌
 には直截的で、現実を目の当たりにした力強

ささえ感じられたのだが、この頃では、なぜか、不安定さや、内面のもろさが露呈されているような気がする。时期的に、これまでのように安穩としてはいられない社会情勢にも影響しているものと考えられるが、『惜しみなく愛は奪う』、そして『宣言一つ』後の有島武郎自身を語っているようにも考えられるのである。

(三六)

会員のみなさん

「大町桂月の 大雪山登山百年」

清水敏一

大町桂月は、大正十年(一九二二)大雪山に登山、今年が桂月の登山百年という記念すべき年である。それはまた「層雲峡」命名百年でもある。桂月の登山は本格的で、文人のなかでもひとときわ傑出し、俳人・河東碧梧桐とともに文人登山家の双璧であった。彼は全国の山を遍歴、北海道の高峰を踏破すべく来道した。そして旭川駅前の老舗旅館・三浦屋を拠点にして大雪山に登ったのである。

彼は当時「霊山碧水峽」と呼んでいた石狩川上流を探勝、大雪山へのルートを求めて未

踏であった黒岳沢(桂月の登山記は「凌雲沢」としてある)を溯り、無名であった桂月岳に登頂したのち、黒岳、北鎮岳、白雲岳、旭岳を縦走して松山温泉(天人峽温泉)へ下山した。翌日、羽衣の滝を探勝して忠別川上流(天人峽)沿いに降り旭川に帰着している。

この登山記は三年後の一九二四年、総合雑誌『中央公論』に「層雲峡より大雪山へ」として発表された。それは層雲峡を活字化した最初の記録である。

だが一連の登山ルートは桂月が企画したものでない。当初、彼は当時の一般ルートである忠別川からの入山を考えていたのである。それが急遽、変更になったのは塩谷温泉(後の層雲閣)主・塩谷忠の画策によるものであった。桂月の塩谷温泉泊、層雲峡探勝、黒岳沢ルートもすべてそうである。彼の策略に乗せられた桂月であったが大いに楽しんだようである。特に未踏の黒岳沢に強く惹きつけられたのであった。とはいえ最高齢の桂月



に万一のことがあれば取り返しがつかないので、塩谷にも慎重にリードをした。好天に恵まれ事故もなく無事、難所を突破することができて胸をなでおろしたのは塩谷である。

あれから百年、桂月の下山した地元東川町では「大町桂月大雪山登山百年展」を開催、彼の登山を顕彰した。一方、入山した上川町のりんゆう観光では「層雲峡」命名記念の銘菓を制作発売している。

短歌にはまってる

鎌田章子

旭川歌人クラブの事務局をやっています。前任者が倒れて急遽代行する事になり、その後、嫌も応もなく担当することになりました。手探りであちらこちらに迷惑をかけながらの三年目です。

私は悔しいことが続いていた時、誘われて中央公民館の短歌講座に参加しました。初めて作った歌が

誇られしわれを励まして胸を張れど
耳をかすめる風をつめたさ

実体験だけの歌です。下の句が比喻だと思われるかもしれませんが、十一月の冷たい風が吹き抜けていく旭川の風景そのままを歌いました。この歌を講師が褒めてくれて短歌にはまったのです。

その頃、私は別部署の人に「鎌田はミスが多い」と陰口を言われていました。直接指摘してくれたら注意の仕様もあるのですが、私には何も言わないのです。別部署に勤務する友人に何が問題かを尋ねてみましたが、理由は見つけられないまま。上司たちの集まりでその話を聞いた私の直属上司が自分の知らない部下のミスを不審に思ってくれ、「あいつの方が先に退職するんだから今は気にせず頑張り」と慰めてくれました。

短歌を作るようになって自分自身の心のうちと対面することになり、自分の喜びや悲しみ、辛さをじっくり考える習慣がつかまりました。時には自分の至らない点に気付いたことも。「なにくそ」という反骨精神はここで育てられたのでしょうか。私を信頼し支持してくれる上司や同僚に恵まれたこともありがたいことでした。

今、私が一番困っているのは歌人クラブの会員が減っていることです。高齢化が進んで、若い人が入って来ない。日本中が高齢化、少子化なのだから仕方がないのかもしれないけれど…。何か対策は、と無い知恵を絞っているところですが、どなたか良い策を授けてくれないでしょうか。

「旭川詩人クラブ」の近況

立岩 恵子

当会は、ひとつの詩誌の集まりではなく、個々に参加するクラブですので、多種多様な感性、詩論を持った方たちの集まりで、役員改選をしながら早四十四年です。

現在は、古くからの会員と入会五・六年目の新しい会員とで十六名。和気あいあい、時には丁発止と、月一の例会、詩画展、アンソロジー発行などを楽しんでおります。

月一の例会は一時間半ほどですが、年度初めに各月の担当(一〜二人)を決めておき、その担当者が自由に企画します。好きな詩人の詩の解説、詩の道に入った経緯、有名詩人の音声をお聴かせしてくれた事もありました。今日は何かしらと楽しみに集まるわけです。そして最後は即興詩、これまたドキドキものです。題は何だろう。それに行数の制限があったり、オノマトペを入れよとかの指示があったりで、二十分で仕上げます。即プリントアウトして朗読、感想タイム。時には、無記名で提出させられ、投票させられた事もありました。一時間半は短いですが濃厚です。

しかし、コロナ禍のため、昨年度は三回のみ、今年度はゼロ回です。

詩画展は企画展示室の年間計画の中に入れていただき毎年開催していましたが、これま

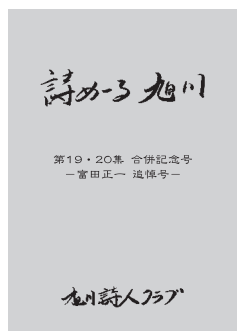
たコロナ禍のため二年連続で中止です。

そこで、会長のご容態がすぐれない事もあって、「アンソロジー」に全力投入。次号との合併記念号とし、会の四十四年の歩みも載せ、秋発行のところを春にと急ぎましたが、残念ながら間に合いません。富田正一氏は一九六八年より二代目会長の任を担って下さり、会の今日があります。感謝です。コロナ禍が収まってきたら記念号を手に皆で集まり、会長を偲びながら心おきなくおしゃべりする事になっていきます。

時は同じく春四月、小熊賞受賞詩人の佐藤比左良氏も旅立たれました。私たちが資料館で初めて開催した詩画展の時、イベントで、ご講話いただきました。ボランティア作業で一緒にしている誼で、アンソロジーや詩画展の度、一言いただくのですが、さすが大いなる詩人の一言で、キリリと心に響くのでした。やはり、感謝です。

大いなる詩人お二方に出会い、ご一緒させていただいた事、幸せに思います。

さて、当会のこれからは？



「詩め-る 旭川」
第19・20集 合併記念号
富田正一 追悼号

資料館だより

旭川文学資料館の新しいパンフレットと、旭川文学資料友の会の入会案内が出来ました。



■受贈資料 (敬称略)

(二〇二一・三〜二〇二一・七)

- ・澤田 展人 「逍遙通信」二、四、五号
- ・那須 敦志 「寒寒計」一〜五号
- ・小熊秀雄協会 会報二十号
- ・豊島区文化商工部文化デザイン課 企画展図録『池袋への道』、「かたりべ」一三六〜一三九号

- ・天草 季紅 「さて」第九号
- ・本田 初美 本田初美詩集『芭露の森』
- ・網谷 厚子 詩誌「万河・Bang a」二十五号
- ・名寄市史編纂室 北国研究集録十二号別刷／宗片清美「長野政雄・名寄に残した足跡」
- ・齋藤史全歌集 1928-1993
- ・他、道内歌集多数
- ・星 まゆみ 星まゆみ詩集『ひだまり』
- ・長田 典子 長田典子詩集『ニユーヨーク・デイグ・ダグ』、「詩と思想」二〇二一年七月号
- ・菱谷 良一 『菱谷良一 百歳記念作品集』
- ・鈴木 紘一 『旭川の子ども』(旭川市立中学校生徒文集) 他
- ・鎌田 章子 「北方四島」のアイヌ語地名ノート他
- ・百井 昌男 山村輝夫関係資料多数
- ・塩尻 伸司 農民組合関係書籍他
- ・西村 壹子 児童文学全集他多数
- ・富岡 悦子 富岡悦子直筆原稿、富岡悦子詩集『反暴力考』
- ・高岡 修 高岡修直筆原稿、高岡修詩集『蟻』他、高岡修詩集、句集
- ・東 延江 「グラフ旭川」他、詩集等
- ・谷川 利子 『旭川市立大有小卒業記念』
- ・寺澤 京子 富田正一氏旧蔵資料
- ・佐藤 蓉子 佐藤比左良氏旧蔵資料

その他、各地文学館、記念館館報、各地市民文芸、文芸同人誌、歌誌、俳誌、詩誌等たくさんの方の寄贈を受けました。心よりお礼申し上げます。

友の会人事動向 (敬称略)

【新入会員】

植西富士子、岸 三千代、柳澤 美晴

【現在会員数】(八月末現在)

一七六名(うち法人六件)

編集後記

「暑いですねえ」と繰り返していた夏もオリンピックの閉会とともに去り、空がいつの間にか高くなっていた。

続くコロナ禍でこの春の友の会総会がまた開けず、企画事業も変更や中断を余儀なくされた。いつになったら安心安全な日常を取り戻すことができるのだろうか。

そんな中、今年度最初の企画展で菱谷良一さんの講演が無事行われた。もうじき百歳を迎えられるとお聞きしたが、原稿なしで一時間余り、その記憶力とよどみない話しぶりに大きな刺激をいただいた。そして「この頃物忘れがひどくて……」などと言っている場合ではないと大いに反省。

暗い出来事が多い昨今ではあるが、小さなことでも明るい話題を探しながら、笑顔で前を向けたらと思う。(ま)

